

# 辞書における定義づけの批判

けん ぼう ひて ざし  
見 坊 豪 紀

Criticism of Definition in the National

Language Dictionary

Hidetosi KENBŌ

1

(創元社 蒲原有明全詩集p.130 昭和27)

かんばらめりあが  
蒲原有明の作品に「癡夢」というのがある。

註：(1)「誰も」と誤植している。

(2)「慰さめ」と誤植している。

いんしつ なげき まど  
陰湿の「嘆」の窓をしも、かく  
うちまきましろ  
うち塞ぎ真白にひたと塗り籠め、  
うへ た かも あやおり  
そが上に垂れぬる氈の紋織——  
あけみどり まば  
朱碧まじらひ匂ふ眩ゆさ。

み み ほ こゝろまど  
これを見る見惚けに心惑ひて、  
たれ あ、 しやう ひとま  
誰を(1)、噫、請ずる一室なるらむ、  
ねがひ のぞみ  
われとわが願を、望を、さては  
まらうど い よび  
客人を思ひも出せず、この宵。

たいねん まど  
唯念ず、しづかにはた圓やかに  
ひやくらふ かがね たい とも  
白蠟を黄金の臺に點して、  
ほのほ へ わ  
その焔いく重の輪をしめぐらし  
い  
燃えすわる夜すがら、われは寝ねじと。

つれづれ なが あい ひとふし  
徒然の感さに愛の一曲  
なま おも  
奏でむとためらふ思ひのひまを、  
しの よ かげ た おそれ  
忍び寄る影あり、誰そや、——畏怖に  
みやく ろうこく  
わが脈の漏刻くだちゆくなり。

なが よ めしひ なげき  
長き夜を盲の「嘆」かすかに  
いき げもん かも  
今もなほ花紋の氈をゆすりて、  
い き あへ さか しよ  
呼吸づかひ喘げば盛りし燭の  
ほ かげ やく なび  
火影さへ、益なや、しめり靡きぬ。

し めめ  
癡れにたる夢なり、こころづくしの  
ひとま  
この一室、あだなる「悔」の蝙蝠  
けうと  
気疎げにはためく羽音をりをり  
おと あ たま  
音なふや、噫などおびゆる魂ぞ。

吉田精一氏によれば(1)、《「癡夢」は「有明集」  
〔明治41年1月易風社刊〕中でのすぐれた作で  
あつて、人によつてはこれを全作中の最名作の  
一に数へる》くらいである。原作は明治《三十  
九年四月早稲田文学にはじめて発表されたが、  
その時の詞句と〔「有明集」のそれと〕は若干の  
相違がある。》ここに引用したのは、原作では  
なく、「有明集」におさめるために作者が手を  
いれた分である。

註：(1) 吉田 精一「日本近代詩鑑賞 明治篇」  
昭和23 天明社。引用は、どちらも  
P.168. [ ]は見坊

5・4・7調の、なんとなくものういリズムが、  
用語、内容とあいまつていかに効果をあげてい  
るか、ということは今とりあげない。わたしの  
目的は、あくまでも、国語辞書批判のための具  
体的1例をひろいだすにある。

見られるとおり、引用中には耳どおい単語が  
いろいろ使われている。泣堇、有明を頂点とす  
る明治象徴詩には、こうした現象が多いように  
思われる。たとえば、泣堇の代表作のひとつで  
ある「ああ大和にしあらましかば」をとりあげ  
ても、

いづめ  
涙眼 お講風ぎ 桂をとめ 化のもの  
せび  
狭に そそ走りゆく 塵居 梁ぼこり  
ゆふご  
夕越 夕ながめ ゆるかに

のような、古典語、雅語ないしはそれらに基づ  
いた新造語(?)がぞくぞく現われる。そして、

これらの一部分だけでも登録している国語辞書は、皆無といつてもあまり言いすぎではない。明治象徴詩の気分と内容とを深く味わおうとする現代の学生・青年にとつて、これは余りに大きな、言語の抵抗ではあるまいか。

もつとも、用語に関する限り、有明は泣菫ほどは難解でない。しかし、題目の「癡夢」をはじめとして、つぎのような用語は、多かれ少なかれ抵抗を感じさせるにちがいない。

氾<sup>かみ</sup> 見惚<sup>なぐ</sup>け 感<sup>さ</sup>さ くだちゆく 盛<sup>さか</sup>りし  
花紋<sup>はなもん</sup>（癡れ）にたる 〔出現順〕

もちろん、ここにあげた用語のすべてが、辞書をひかなければ分らないことばというわけではない。これらの用語をとりあげた目的のひとつは、いうまでもなく、わたしの知識の補充とたしかめとにある。しかし、他のひとつは、国語辞書の性能の、たしかめと批判とにあるのである。（そして、後者の目的のためには、とりあげるべき用語がまだまだ出てくる。）

国語辞書はわたしたちに知識を提供してくれる。が同時に、国語辞書はいつでも読者から批判されなければならない運命にある。読者は辞書に切られた瞬間に、辞書を切りかえさなければならぬ。

辞書の長所・短所は一種類ごとにみなちがう。そして辞書を批判する方法もいろいろである。見出し語の数・範囲・性質とか、定義〔＝意味〕の与え方・分け方・ならべ方とかの吟味から、値段・ページ数・活字・判型などに至るまで、批判の観点は非常に多い<sup>(1)</sup>。

註：(1) 小論「国語辞書の盲点」国語科教育第一集P.78～97（昭和27 教育評論社）は、見出し語の観点から、現代の代表的な辞書の性能を吟味した報告である。

「癡夢」一編を材料として、辞書の批判をするためには、この作品にあらわれるすべての単語を50音順に整理し、これを各種の辞書について、かたつばしから吟味していく方法も考えられる。能率をあげるためには、あきらかに登録されていそうな単語は省略し、そうでない単語

だけについて同じ手つづきをとる方法もある。前にぬき出した「氾」以下の数語と、題目の「癡夢」とは、こうした目的にふさわしいものである。わたしは、ここに、題目の「癡夢」一語についてなされた辞書批判の記録を卒直に記述したいと思う。近代象徴詩「癡夢」研究の本道からいうと、これは単なる寄り道である。鑑賞の産物ではなくて、ひとつの副産物にすぎない。しかし、「癡夢」の辞書的研究から言うならばこれはまさしく直接の産物なのである。

## 2

癡夢ということばを材料としてとりあげた理由は、意味がすこし、はつきりしないので、たしかめたかつたし、それにどうも国語辞書には、のつていそうもないように感じられたからである。予想はあたつて、「癡夢」ということばは、この国の二大代表辞書のほかすべての国語辞書、すべての漢和字書に登録されなかつたことが明らかになつた<sup>(1)</sup>。

註：(1)「癡夢」を登録したのは、新撰和エス辞典（Nova Vortaro Japana-Esperanta 昭和10 日本エスペラント學會）ただ1種類であつて、〔malsaĝa songo と譯してある・おろかな夢の意味〕以下の32種の辞書は全部役に立たない。

- A 言海 大日本国語辞典 言泉 大言海 大辞典 小辞林 廣辞林（新訂版） 辞苑 言苑 新辞海 辞鑑 明解国語辞典（舊版） 言林 小言林 明解国語辞典（改訂版） 辞海 国語博辞典
- B 大字典 新修漢和大字典 新撰漢和辞典（増訂版） 新字鑑（改訂版） 常用漢字辞典
- C 辞源（正續） 辞海〔以上2種は中國版〕
- D ローマ字で引く国語辞典（富山房） スタンダード和英辞典 最新コンサイス和英辞典（木村氏）和獨辞典 新和英大辞典（増補版） Hanasikotoba o hiku Zibiki ローマ字で引く国語新辞典（研究社）
- E 日本語アクセント辞典 同左・改訂版

以上であきらかなように、「癡夢」という単語に関するかぎり、辞書の性能批判はおわつた。つまり、批判の手がかりさえもまつたく提

供してくれないのである、といつても過言ではない。しかし、この単語は、原文の一節にも「癡れたる夢なり」といつているとおおり、一応「しれたる夢」とおきかえることができる。<sup>(1)</sup>すると「癡夢」追跡の目あては、「しれたる夢」における「しれたる」、または助動詞を除いた部分の基本形である「しる」あるいは、その口語形である「しれる」を追跡することによつて達成することができるわけである。<sup>(2)</sup>

註：(1) 原文の用例にとらわれなければ、「癡夢」は、「癡人の夢」とおきかえることもできるだろう。

(2) 参考のために、「しる(癡)」「しれる」を見出し語として登録している辞書をあげる。

A 「しる」のところで定義を與えているもの。

a. 口語形「しれる」は、ない。 8種

言海 大日本国語辞典(修訂版) 大言海  
大辞典 小辞林 廣辞林(新訂版) 辭鹽  
言林

b. 口語形「しれる」もある。 2種

辭苑 辭海

B. その他の国語辞書、ローマ字引き辞書〔P.51のうち、A, D, E にふくまれるもの〕には、「しる」「しれる」の両方が全然登録されていない。なお、漢和字書類〔P.51のうちBにふくまれるもの〕は、すべて「しる」「しれる」という訓を指定せず、「おろか、しれもの」などの訓を與えているだけである。

付記：ついでに、「ゑひしる(醉癡)」「よいしれる」などの見出し語の有無を調べたら次の通りであった。

1. 「ゑひしる・えいしる」の形で登録したもの。

言泉 大日本国語辞典(修訂版) 大言海  
大辞典 小辞林 廣辞林(新訂版) 辭鹽  
言林 辭海

2. 「よいしれる」の形で登録したもの。

日本語アクセント辞典(改訂版)

3. 「えいしれる」の形で登録したもの。

新辭海

その他の国語辞書、ローマ字引き辞書類〔P.51のうちA, D, E にふくまれるもの〕には全然登録ない。

以下わたしは「しる(癡)」の意味を考えようとするのであるが、まず、わが国におけるふたつの代表的な国語辞書の記述を引用し、これを批判することから出発してみたい。その他の国

語辞書の記述は、結局うへのふたつの辞書のそれにふくまれてしまうので、特に必要のおこつたとき以外はふれないことにする。

まず、大日本国語辞典(修訂版)の記述はつぎのとおりである。

しる 痴(自動) 癡愚なり。無知なり。

又、愚になる。ぼける。土佐日記「上下、わらはまで酔ひしれて」枕+「げすの家の女あるじ、しれたるものそひしもをかし」榮華初花「この宮たち五六人おはするに、すべてしれ、かたくなしきがなきなり」

しれ に しる 痴痴 痴(シ)れたるさまをつよめいふ。竹取「ここちただしれにしれてまもりあへり」

つぎに大言海の記述はつぎのとおりである。

{ま・る・ルル・ルレ・レ・レ・レヨ(自動、

下二) 痴 [器量ノ奥ノ知るる義カ] 心、愚カニナル。惚クル。無知ナリ。愚ル。万葉集。九次長歌「世間ハ、愚人ノ、吾妹児ニ、告ゲテ語ラク」竹取物語「心地タダまれにまれて」源、廿一、少女三「子ノ、大人ブルニ、親ノ、立チカハリ、まれ行クコトハ、幾何ナラヌ齡ナガラ」榮華物語、八、初花「此の宮達、五六人オハスルニ、スベテ、まれ、頑シキガ無キナリ」

いまこれらふたつの辞書の記述について、まず吟味しなければならないことは、用例の出所である、大日本国語辞典によると、「しる」は土佐・竹取・枕・榮華

の、四つの作品に出ているのであるが、大言海によると、さらに

万葉・源氏

の二つがかわわる。一見してこのことばは、遠く万葉集のいにしえに、さかのぼりうる古さを持つものごとくである。しかしながら大言海の引用文からもたやすく想像されるように、この長歌〔水の江の浦島の子をよんだ長歌〕は、万葉集巻の九が一般にそうであるように、一字一

音の万葉仮名では書かれていないのである。そのうえ、ちょうどこの部分は古来異説、異訓のおおいところである。はたして「愚人」という字面を「しれたるひと」とよんでよいかどうかは、じつは疑問なのである。「しれたるひと」というよみかたは旧訓であつて、現在は「おろかびと」とよむ方がかえつて普通になつていくくらいである<sup>(1)</sup>。「告げて」のところも諸注釈は、「のりて」とよませることに大体一致しているし、「世間之」を「よのなかは」とよむに至つては、あるいは大言海の誤植ではないかとうたがわれるくらいであり、旧訓もふくめて、すべての注釈書が「よのなかの」となつている。

要するに、大言海の引用文のよみかたは、古来つたえられている旧訓をそのまま取り入れたものであつて、しかもそれが現代の各注釈書によつて否定されている以上、このさい万葉集のこの部分を証拠に持ち出すことは賢明でない、というべきであろう。万葉集は出典から、はぶいた方がいい。〔大言海の引用の部分で異議なく承認されるのは、「わぎもこ」ぐらいなものである。〕

註：(1)参照 新校萬葉集、定本萬葉集、萬葉集全釋、萬葉集新釋など。

第二に問題としなければならないのは、定義〔=解釈〕の部分である。ふたつの辞書を比較してみるのに、大日本国語の方に一層問題が多いから、便宜上、大日本国語の方から吟味したい。この定義をみてすぐ気をつくことは、与えられた定義の適切さがどうか、ということよりは、ここには、二つのまつたくちがつた秩序に属する物の言いかたがなっている、ということである。わたしが思うのに、「痴愚なり。無知なり、」という言いかたと、「愚になる。ぼける。」という言いかたとはまつたく性質がちがつている。これは一見してあきらかであろう。

前者は状態をあらわす言いかたであり、これにあてはまる用例は、枕草紙の「しれたるもの」ならびに榮華物語の「しれ、かたくなしき」であろう。これに反して後者は動作をあらわす言

いかたであり、これにあてはまる用例は、土佐日記の「酔ひしれて」ならびに竹取物語の「心地しれにしれて」であろう。<sup>(1)</sup>

註：(1) 榮華物語の「しれ、かたくなしき」は動作をあらわす方の用例と考えることもできる。この用例についてはP.55左を参照。

ところが「しる」に対して指定された品詞をみればすぐわかるとおり、このことばは動詞である。動詞は、あまねく承認されているように動作をあらわすのがたてまえである。時間とともに変化することがらを示す、といつた方がなお適切であろう。もつともなかには、「有る・いる・をる」のようにたんなる存在をあらわすものもあれば「似る、見える」などのように、状態をあらわすものもないわけではない。また、極端な場合は、——「いらつしやる」などのように——ひとつのことばが使いかたによつて動作をあらわしたり、状態をあらわしたりすることさえある。しかしながら、＜時間とともに変化する＞というときの変化の程度がゼロであるばあいをもゆるすことにすれば、「ある」「似る」なども＜時間とともに変化する＞ことばのなかに入れることができ、本来「超時間的の静止的観念として」<sup>(1)</sup>とらえられた形容詞・形容動詞とは、はつきり区別することができる。また、「いらつしやる」などのばあいは、やはり動作をあらわす用法がもとであつて、状態をあらわすのは、その転用である。<sup>(2)</sup>

註：(1) 参照 山田孝雄「日本文法學概論」P.212 昭和11 實文館、同上「日本文法學要論」P.42 昭和25 角川書店

(2) 以上の議論は、直接には、すべて終止形だけにあてはまる。助動詞などが接續したばあいは別である、詳細は他日を期したい。

ところで、問題の「しる」は、ひとつのことばで同時に動作と状態との両方をあらわすことになつている。このようなことが認められるための条件はただ一つしかない。「いらつしやる」のばあいに見たように、本義と転義との関係に立つこと、これである。しかしながら、「しる」は、到底この条件を満足させることができそう

もないから〔動詞のソクのなかでは〕、このような二様の定義を与えることは許されないであろう。ただし、動作としての定義を動詞に対応させ、状態としての定義を形容詞または形容動詞に対応させるならば、その限りにおいては妥当な定義づけと言えるかもしれない。しかし、ひとつの属性概念が同時にふたつの品詞を通じてあらわされることはあつても〔たのしい・たのむ〕、ひとつの単語が同時に動詞でもあり、また形容動詞でもあるというようなことは絶対に考えることができない。「また」が副詞であり、接続詞であるということは、たしかにあるけれども、それは、つかいかたにより、場合により、そうなるのであつて、同時に副詞であり、かつまた接続詞であるのではない。「しる」が形容動詞でもあるかのように見えるとすれば、それは、あるばあいにある種の形式的な単語と結合して使われたときだけであつて〔しれたる〕、最初から「しる」それ自体のなかにそのような品詞がひそんでいるのではない。つまり、「しる」をふくむある種の連語が全体としてそのような品詞にあてはまるかのように、みえるにすぎないのである。

動詞はあくまでも動詞として定義しなければいけない。いかに便宜だからといつて、これを同時に形容動詞でもあるかのように定義してはいけない。ここにおいて、わたしたちは、大日本国語辞典の定義の方針を批判することができる。

《動詞は、動詞としての構造に忠実に定義しなければいけない。いな、動詞としての構造が明らかになるような方向にむかつて定義しなければならぬ。》

この辞書がきわめてすぐれた国語辞書であることは、いまさら、ことわるまでもないことであるが、しかし、すくなくとも「しる」に関するかぎり、基本方針をあやまつたと言われても、しかたがないであろう。そして、一般的教訓をひきだすためには、たまたま目にふれたひとつの実例だけでよかつたのである。

しかしながら、第三にわたしたちは、なぜこ

のような奇妙な現象がおこつたかを、さぐつてみる必要がある。一般的な状況を手がかりとするならば、わたしたちは、国語教育であるいはいろいろな注釈書のなかで、「しれたるもの」を「おろかなもの」とか「ばかもの」とかに言いかえる人がいることを知つている。この辞書の「痴愚なり。無知なり。」も、編集者がそのような一般的な状況を頭においたと仮定して始めて正しくうけとられる定義なのであろう。用例として枕草紙から「しれたるもの」が引かれているのは、この推測に有利である。ともあれ、枕草紙の「しれたるもの」を「痴愚なるもの」「無知なるもの」とおきかえると、まるで切つてはめこんだようにうまく当てはまるのである。

しかしながら「しれたる」は、これを全体として「痴愚なり、」でおきかえなくても、「愚になる」をつかつても「愚になつたもの」とおきかえることができ、別にふつごうは起らない。比較的便宜上、「痴愚なる」を「おろかな」とおきかえてみると、<sup>(1)</sup>「しれたるもの」とは、「おろかなもの」または「おろかになつたもの」ということで、どちらにしても余りたいしたちがいはなさそうである。さしめされる客観状況はおなじものであり、要するにそれは「しれたるもの」なのである。

註：(1) 痴愚を、げんみつに定義しようとするとき、「愚」〔=おろか〕のほかに「痴」も定義しなければならぬ。が、これは「しれたる」ということにほかならないから、「痴愚」という定義は、じつは説明すべき内容を始めからふくんだ答えなのである。だから痴愚を全体として言いかえるならば、どうしても「おろか」のほかにはないわけである。

しかしながらよく考えてみると、「おろかなもの」と「おろかになつたもの」とは完全におなじ内容を表わすとは言えない。そのちがいは、「おろかな」と「おろかになつた」とのちがいに対応している。そして、このような違いができあがつたのは、「しれたる」の全体を非分析的に<sup>(1)</sup>理解するか、あるいはこれを成分にわけて理解するかという、行きかたのちがいに原因がある。わたしは、「しれたる」を成分にわ

けて理解する方が語学的には好ましいと思うし、かりに「おろかな」という結論に達することをみとめるとしても、「しれたる」の全体をいきなり「おろかな」とおきかえるよりは、「おろかになつたもの」の意味における「おろかなもの」だ、と理解した方が、いつそうもとの意味に近いように思う。<sup>(2)</sup>

なお考えを進めるならば、「しれたるもの」は「おろかになつたもの」ではなくて、「おろかになつていゝもの＝おろかになつて、いまその状態にあるもの」と理解するほうがいつそう正しいことに気がつく。このさい、「なつた」は「なつていゝ」と考えるべきであり、また、そう考へて始めて、「しれたる」が「おろかな」と誤解されたわけも分かるのである。つまり、「しれたる」は、時間的な変化をふくんでいゝが、とにかくひとつの状態であつたがゆゑに、「おろかな」と考へられたのであつた。

註：(1) 非分析的ということとは、総合的ということではない。総合は分析を前提するが、非分析はそうでない。

(2) 「おろかになつたもの」は、けつきよく、おろかものといふことができるが、しかし「おろかもの」は「おろかになつたもの」ばかりではなく、「はじめからおろかであるもの」をもふくむ。

さてそれでは榮華物語の「しれ、かたくなしきがなきなり。」はどうであろうか。

わたしはさきに、これを「痴愚なり」と解すべき用例としてもいい、としておいた。なぜならこれも「おろかで、かたくなしき[の]が」とおきかえることができるからである。<sup>(3)</sup> しかしながら、このばあいの「しれ」は動詞の連用形であり、その意味構造は「しれてかたくなしきもの」といふのであるから、これは「愚になる。ぼける。」の方を適用して「ぼけて、かたくなしき」と理解した方が一層びつたりするのである。つまり、「しれ、かたくなしき」は「痴愚であつて、かたくなしき」のではなく、「痴愚になつて、[その結果]かたくなしき」のである。

註：(1) 「かたくなし」の定義は、おなじ大日本國語辭典に、かたくななり。云々と出ている。しか

し、「かたくなし」と「かたくななり」とは、その言語構造がちがつている。言語構造がちがえば意味構造もちがう、という假説にもとづき、わたしは、「かたくなし」＝「かたくななり」といふ考へ方をとらない。私見によれば、「かたくなし」とは、「かたくなな様子だ。かたくなに見える状態だ。」といふた、ものの言ひ方（または、もののとらえ方）である、と理解すべきことばである。この相対的意味構造を、絶對的に位置づけるためには、「かたくな」の意味を適當に考へればよい。

このように考へてくると、「痴愚なり。無知なり。」のように状態をあらわす定義は、「しる」単独のばあいには絶對にあてはまらず、あてはまるとすれば、「しれたる」を非合析的にとりあつかうときだけであり、これととも、動詞としての言語構造に忠実に考へていつたほうがかえつて適切である、ということになる。

結論として言へることは、大日本國語辭典の定義のうち、前半の部分「痴愚なり、無知なり。」はけざるべきであり、かくしてこそ始めて、筋のとつた、すつきりしたものになるのである。大言海の定義中にふくまれる「無知ナリ。」も、したがつて、當然けざらなければならぬのである。

### 3

そもそも、「しれたる」を「痴愚なり」とおきえる方法にわたしが不満を感じたのは、これが技術的には小中学校などによく見かけられる、文全体の単純な言ひかえとおなじものであつて、これでは「しれたる」のなかに含まれる「しる」の意味が本質的にはすこしも明らかにされていゝからであつた。すなわち、「痴愚なる」といふ解釈は「しれたる」全体の意味に全体としてあてはまるだけで、「しれたる」の中にふくまれる動詞「しる」それ自体の意味をすこしも明らかにしようとしてはいゝない。われわれは当然、「しれたる」全体を「痴愚なる」とおきかえる無反省な行き方をすてて、

しれたる＝しれ+たる

と分析することから始めるべきである。「しれ

たる」が全体として「痴愚なる」である、ということはいい、しかし、「しる」は決して「痴愚なり」でない。それはちょうど、 $p+q=a$ だからといって、ゆえに $p=a$ と考えるのがこつけないのと同様にこつけないことでなければならない。

つぎに不満を感じたことは、定義につかわれたことばのむずかしさであった。「痴愚」はそんなに分かりやすいことばでない。念のために大日本国語辞典の「ちぐ」のところを見ると、「おろかなること。ばか。」と書いてある。それなら始めからそう書けばよい、と思うのはけつしてわたしひとりではあるまい。あるいは思うに<定義の文体、用語は壮重であるべきだ>という無意識の前提がそうさせたのかもしれないが、あることばの意味を知るために、定義でてくる用語の意味をいちいちたしかめなければならない、ということは、どう考えてもつまらないこととしか思われたい。

第三にわたしが問題にしたくなつたのは、はたして、「しる」=「おろかなること」とみとめてよいか、ということであった。p.55左にも暗示したことではあるが、あらためてこの問題を取りあげて、「しる」の本義にできるだけ接近してみたい。常識的には、

(1) しる=おろかなること=ばかなること  
という相等関係をみとめたとき、われわれは「しる」の意味がよく分かつた、といえる。むしろ一般の人には、「しる」の言語的な把握よりも、

(2) しる=おろか=ばか  
のような、ことばに含まれる(ことばが指ししめず、といつてもよい)観念内容または属性概念の近似的な相等関係の認識だけでも、もう話がよく分かるのである。かれらは、そう信じている。そして、それで用がたまる。しかし、ここで何が分かつたかと言えば、ことばが指ししめず概念または、客観状況だけであつて、それ以外のものは何も分かつていない。物理的・生理的な状況が頭にうかんでくるだけで、言語的状況のこまかなところは、なにひとつ明らかになつていない。関係(1)のように理解するなら

ば、言語的にもかなりはつきりするけれども、これは、じつは問題の解釈であるよりは、問題のあらたな提出であるといつたほうが適切なのである。

ことばのほんとうの意味・用法を知らせるには、現代の国語辞書はあまりにも粗雑な方法論しか持ちあわせていない。国語辞書だけにたよるかぎり、わたしたちが、引くこといよいよ多くして疑問のいよいよ多いことを嘆かざるを得ないのは、決して偶然ではないのである。現代の国語辞書の多くは、じつにそうなるように出来ているのだから。

さて、関係(1)にもどる。「おろかなること」と「ばかなること」の相等関係はなりたつかもしれないが、この二組と「しる」との間には相等関係がなりたたないのではないか。すなわち

(3) しるキ {おろかなること=ばかなること}  
という関係が考えられるのではあるまいか、というのがわたしの意見である。「しる」の用例をいちいち吟味し、それが含蓄するところのものをあじわうことによつて、そう判断する。

たとえば、土佐日記の「酔ひしれて」を考えてみよう。これは、「よつて、頭がバカになつて」と理解するよりは、「よつて、頭がバカになつたような外観を呈して」と理解した方が、「しる」の含蓄するところのものが一層よく分るのではないか。竹取物語の「心地しれにしれて」も「気持がひたすらバカのようになつて」ということであつて、ただ単純に「バカになつて」と解すべきではあるまい。すなわち「しる」は、「なにかが原因でバカのようになる」ときにつかうことばなのであろう。かりに、「バカになる」という解釈をみとめるとしても、それは「知能が劣つてくる。」という意味の「バカになる」ではなくて「現象的にバカになる。バカの外観を呈する。」という意味の「バカになる」であらう。(つまり、「バカになる」という言い方が使いたければ、比喩的用法としての「バカになる」であるということ、解釈者はよく分かつていなければならないと思う。)そして、そのような外観を生じさせる原因とな

ものだが、ほかならぬ「しる」であらわされることがらなのである。それが、「しる」の本義なのである。つまり「バカになる」というのは、「しる」ということそれ自体ではなく、「しれたる」結果としてあらわれることがらをさしめしている、とわたしは考える。さきに、関係(1)は成りたつことができず、関係(3)が成りたつのだらう、といつたのは、そのためである。とにかく「しる」をこのように解釈しておいた方が「しる」の本来つかわれるべき場合をはつきりさせることにもなり、また、こう考える方が「しる」のあらゆるつかいかた〔「しれ、かたくなしき」「しれもの」「しれ言<sup>ことば</sup>」「しれじれし」「しれ笑ひ」など〕を統一的に、根原的に説明することができると思つている。

それでは、「しる」は本来どういふ場合につかわれることばであつたか。わたしが思うに、それは大日本国語辞典の一番おしまいになげなく書かれてある「ほける」によつて暗示されている。列挙された四つの定義のうち、最後のものが、偶然(?)にもその本質を射抜いた。ただし真正面からはなしに、ななめから。

「しる」の真の意味は、P55左に暗示したように、状態と動作とを適切に結合させるところから、正しく解明されるであらう。「しる」は単なる動作をあらわす〔=〜になる〕ことばではなく、「ある状態になる」ことを表わすことばである。状態と動作とを混同した奇妙な解釈が行なわれる根拠がそこにある、ということは前にもふれたとおりである。「ほける」という定義(?)が、「しる」の本質を暗示している、といつたのも、ひとつは「ほける」が「ほ一つとした状態になる」ことだからであつた。つまり、「ほける」は「しる」にいちばん近いことばなのである。かくして、たどりついた「しる」の本義は、おそらくつぎのようなものであらう。

《なにかの刺激で、精神がもうろうとした状態になつて、わけが分からなくなる。その結果バカのような外観をみせる。》

もちろん、意味の重点は前半の「精神もうろう」というところにあつたのであらう。しかし

いつのまにか重点が後半の「バカのようになる」にうつつて行くにつれて、「バカ。バカバカしい。ちもない。たわいもない。」といった意味につかわれだした、のではあるまいか。

4

ことばの意味とか解釈とかいふことは、そのことばがどんなときにつかわれるか、ということをよく考えればしぜんに分かることである。そのような考察をぬきにして語義を考えるということは、じつはナンセンスでさえあつた。

ことばの意味を、ことばの用法とは独立にある、なにか実体的なものと考えること、解釈とはその実体的な意味なるものを、どこか別なところから〔たとえば国語辞書から〕もつて来て当てはめることだと考えること、これは大変なまちがいである。(1) ことばの意味は、論理的には前後の関係〔コンテキスト〕により、心理的にはそのときどきの具体的な客観状況により、全体的・機能的にきまつてくるものである。(2) コンテキストや客観状況などから切りはなされたことばというものは、たとえば文楽座の舞台から楽屋に持ちかえつた人形のようなもので、ほとんど無意味な存在にすぎない。それだけではなにひとつきまつてこないで、ただ空論的にいくつかの状況があれこれと思ひつかふにすぎない。意味のあることばでない以上は、じつはことばでさえないのである。〔「意味のある」ということは、「意味のきまつた」ということである。〕それにもかかわらず、断片的なことばや単語に、なにか特定の意味が固定しているようにみんなが思つていけるとするならば、それは、くだんのことばが、非常にたくさんのコンテキストのたばによつて、いわばしばりつけられており、ひとはそのことばを聞いたときに、すぐそのコンテキストを思ひつかふ、その関係においてそのことばを受けとることができるからである。

註：(1) それだからといつて、国語辞書の定義が、解釋に役だつことができないと主張するわけで



はない。國語辭書は、ことばの解釋にじゆうぶん役立たなければならぬばかりか、よい定義を示すことによつて、解釋作業を指導しなければならぬのである。

- (2) 單語の集團を全体的に言いかえることが許される根拠がここにある。ただ、このことと、言語構造を通してなされる解釋とは、じゆうぶん區別しなければならぬ。

もつとも、どんなことばを聞いても、すぐコンテキストを思いうかべる というわけにはいかない。そこにはいろいろの段階がある。「山」は、だれにもすぐ周知の地理的状況を思わせるであろう。「やま」ということばがやさしいことばであるのは、文字がやさしいばかりでなく、だれもがすぐ共通のコンテキストにおいて山を思いうかべることができ、しかも思いうかべるコンテキストそのものが理解しやすいからであろう。「家」についても事情はほぼ同様である。しかし、同じ家でも法律的コンテキストにおける家は、これに反してけつしてやさしいとは言えない。また、「かげみ(影身)」とか「めしよう(眼性)」とかのように、特定のコンテキストを要求し、そのコンテキストから切りはなしてはほとんど理解のできないことばもある。「かげみ」は「かげみに添う」というときにだけ意味が定着するのであつて、それと無関係な「かげみ」は全く意味をなさないのである<sup>(1)</sup>。また、「眼性」ということばも、「眼性がいい(わるい)」という言い方だけを要求するのであつて、それをぬきにした「眼性」そのものは、あまり独立性をもたないであろう。<sup>(1)</sup>

註：(1) ひとつは、誤解によつて、不自然な單語ができてしまつたことにも理由がある。正しくは、「影が身にそう」という言い方であるべきであり、「影身」というものに、何が添うのではない。「魚心あれば水心」というのも全く同様にして、誤解から成立した單語であろう。「魚心」とか「水心」とかいう、特殊のころがあるのではない。「魚、心あれば、水[もまた]心あり」というのが本来の言い方なければならぬ。このような不自然な單語はほかにもある。

- (2) たとえば、里見弴の「<sup>やつれ</sup>縁談妻」P.62(大正14

改造社)には「馬鹿に眼性のいい阿野には片手を軽く幌の骨にかけて、すましこんで乗つて來るのが、紛れもなく、一目で都留子と知れた。」とある。

このように、そのことばの〈おいてある〉關係をつかむことによつて、わたしたちは正しくそのときの意味を理解することができるのであるが、このことは同時に、〈おいてある〉關係がかわれば、意味がかわつてくる、ということを表わす。おなじ山ということばでも、山師が鉱山について、「[買った]やまが あたつた」というときと、學生が試験場で「やまが あたつた」という時とでは、まつたく意味がちがう。

語感というものも、あるときは、あることばの音相がもたらす、聴覚的・生理的な好悪の感じをさすこともあるけれども、ことば、そのものが呼びおこす漠然としたふんいきとか、ひとびとの記憶の底にしずんでいる、ことばの〈おいてある〉具体的状況、というふうに理解されることがあるのも、以上の考察からして容易にうなづくことができるであろう。けだし、ことばとは、元來そうした具体的なコンテキストぬきには考えられないからである。

こう見てくると、ことばの意味とは、「(ことばの〈おいてある〉)コンテキストの、たばになつたもの」と見なすことができよう。<sup>(1)</sup> 一般的にいうならば、ことばの意味は、コンテキストに応じていろいろにきまつてくるのだから、数学的表現を利用して〈意味は、コンテキストと函数關係にある〉と言つてもかまわない。しかし、いろいろにかわるということは、必ずしも連続的に微少な変化をするということではなく、コンテキストがいろいろにかわつても、その中のことばがさし示すものごとは、飛躍的、不連続的にしかかわらない。たとえば、「山にのぼる、山が高い、山を通る、山に住む……」などとコンテキストを変えても、そのばあいさしめされるものごととしては、いちじるしい変化があるわけではない。そこで、たくさん糸が一カ所に集中してタバをなし、また別な所に集中してタバをつくる、というのが、コン

テキストと意味のきまり方との関係を暗示するためには都合がいいので、このような比喻を借りたわけである。特定の意味が特定のことばに固定して、あたかも、意味それ自体がことばと独立の実体のように見えることがあるとすれば、そこには非常に大きなタバ、非常に強いタバがあるからにはほかならない。

註(1): これと同様の考えは、ゲーツらの「教育心理学」(1942)にも次のようにのべられている。

「ことばの意味はそのコンテキストにつれてかわる。一例として次の文における“run”のいろいろな意味を考えよう。(中略) いちいちの場合になにを意味するかは、文のコンテキストによつてきまる」(Gates, Arthur I., Arthur T. Jersild, T. R. Mc Connell, and Robert C. Challman *Educational Psychology*, P. 433.)  
[Bond, & Bond *Teaching Child to Read*, 1948. P. 140 による]

ことばの本義というものも、じつは右のようなコンテキストのたばのうち、最初に成立したものをさすのであろう。語原の考察は、たしかに重大なことには違いないが、ここに述べたような「意味」の考察ないしは解釈法の実践ということも、教室において、あるいは注釈書の研究において、あるいは辞書の定義の検討において必要なことであると思う。

わたしの考察は、心理学の用語によれば、内観法にあたるものである。したがって別な資料やちがつた用例を使えば、「しる」の意味を、全く別に解釈することができるかも知れない。その意味でわたしの議論は説得力にとほしいと批評されてもしかたがない。しかし、それにもかかわらずわたしは、国語の解釈において、このような方法が可能であるばかりでなく、必要でさえあること、また国語辞書における定義づけの作業においては、特に重要な方法であることを強調したいのである。国語辞書の欠点は、意味論のこのような方法をぜんぜん考えていなかったところにあるのではないか。この方法をいちいちのことばに実践することによつて、国語辞書は大きな本質的飛躍をとげることができるにちがいない。

なお、大言海の定義をついでに吟味すると、「心愚カニナル。惚クル。無知ナリ。愚ル。」という定義は、大日本国語辞典よりは質がいいと言える。なぜか。この定義は、「しる」ということばの構造に忠実であろうとしているから。「心愚カニナル。惚クル。」から定義が始まっているのは、その証拠のように感じられる。そしてこの行き方は大言海のいたる所に現われていてここだけの偶然ではない。これはあきらかに、編者の意識して行なつたところであろう。げんに、大言海の凡例をみると、動詞は動詞で定義し、形容詞は形容詞で定義すべきだということを編者が力説している。<sup>(1)</sup>これは定義づけの実際に便利だというばかりでなく、ことばの内面にひそむ力学的構造を明らかにするのに役立つという意味で、あるいは編集者自身が自覚していたよりは、はるかに本質的な重要性を持つものと思われる。そのかわり、与えられた定義<sup>(2)</sup>が、すこしばかりじじむさくなつてくるのは、やむをえない。

註:(1)「此篇[大言海]ニテハ、(中略)名詞ハ名詞ニテ釋キ、動詞ハ動詞ニテ注シ、副詞ハ副詞ニテ説ケリ、(下略)」大言海凡例(四十三)

(2) 現代の国語辞書では、定義の部分とシノニムの部分との區別をはつきりさせるような習慣はまだできていないように思われる。だから、わたしが、定義といつても、じつは漠然と、語釋・釋義・同意語などのすべてを含んでいることになる。

付記:(1) 大言海の定義づけの方針がいいからといつて、大言海の語原説までもいい、というのではない。ひろはく認められているように、大言海の語原説には、従いがたいもののがかなり多いのである。また、方針としてすぐれているといつても、いちいちの定義がことごとく大日本国語辞典のそれよりもいい、というわけでもない。結果的には、どちらにもいい所がある、ということになる。しかし、方針としては、大言海の方が自覺的でいいと思う。ただ、大言海の定義づけは、必然の結果として、直観主義を排斥したと思われるために、うまい譯語、びつたりする譯語をさがすためには、しばしば大日本国語辞典の方が役に立つことがある。

(2) 創元社版全詩集の誤植については編者の野田宇太郎氏の調査をわずらわしたことを特記し、謝意を表す。(1948初稿・1952改稿)